

『一番近くで見た、夢のカタチ』

(紀の川市優秀賞受賞)

打田中学校 1年 森本 華歩

夕暮れの時、学校から帰って玄関のとびらを開ける。「ただいま」と言うと、キッチンから「おかえり」という優しい声が返ってくる。それが私の当たり前の日常でした。

私の母は、ずっと私たち姉妹の事を一番に考え、寄りそってくれる人でした。

私の妹には発達障害があり、母はいつも妹の成長や将来について人知れず悩んでいるようでした。時には涙を流したり、いき詰まったりしている姿も見てきました。それでも母は、妹がどうすれば楽しく過せるか、どうすれば妹らしく生きていけるかを考え続け、いつも温かく私たちを包みこんでくれました。私にとっての母は優しくて家庭を守る存在。そんな母のことが私は大好きでした。

ところが、そんな日常に大きな変化が訪れたのは5年生の頃でした。母が「会社を作る」と言い出したのです。きっかけは、妹との生活の中で感じた「願い」だったそうです。同じようなお母さんたちの助けになりたい。そして、障がいのある子供たちが、だれかに決められた道ではなく自分らしく自分の人生を選択できる場所をつくりたい。そんな強い思いから、母は1から「障害児通所支援事業」を立ち上げる決意をしました。家でゆっくり過ごしていた時間はパソコンに向かって書類を作る時間や、だれかと熱心に電話でうち合わせをする時間にかわりました。そしてついに、紀の川市に発達応援スペース「ジブンドキ」という場所ができました。母は1人の「母」から「社長」になりました。

正直に言うと、最初は少しだけさみしかったです。学校から帰っても母が仕事でいない日が増えました。夕食の準備をしながら仕事の話をしていたり、以前よりもずっといそがしそうに走り回ったりしている姿を見て、「前みたいになにも気にせず話したいな」と思ったこともあります。でもそんなさみしさを吹き飛ばしたのは、母の表情でした。

母は、前よりもずっと生き生きとしています。自分の夢に向かって1歩ずつ道をきり開いている姿。だれかのために生きたいと一生けん命に汗を流す姿。その姿は以前の優しさに加えて、強さと輝きを放っていました。

「ジブンドキ」という名前には子供たちが自分らしくいられる時間を大切にしたい、という思いがこめられているそうです。その場所で子供たちや保護者の方々と向き合う母は、本当にほこらしくて、かっこいい。私はいつの間にかさみしさよりも「私のママ、すごいやろ。」とだれかに自まんしたい気持ちでいっぱいになっていました。

母は社長になっても、私たちのことを大切に思ってくれる気持ちは変わりません。いそがしい中でも私の話を聞いてくれて、寄りそってくれます。さらに、今の私には、母が自分の人生を全力で楽しんでいるように見えます。

母の姿を見て私は感じたことがあります。それは「大人になっても母親になっても、自分の夢を追い続けていいんだ」ということです。今まではどこかで「母は自分のことを後回しにするのが当たり前」だと思っていました。でも母は身を持って教えてくれました。だれかのために頑張る事は自分を犠牲にする事じゃない。自分が輝く事で周りの人も幸せにできるんだということ。

私にはまだはっきりとした夢はありません。でも心に決めている事があります。それは、いつか私に子供が生まれた時、母が私にしてくれたように自分の夢をあきらめずに追いつける姿を見せたいということ。

母が「ジブンドキ」で子供たちの未来を応援しているように、私も自分の足でしっかりと人生を歩みだれかに勇気を与えられる存在になりたい。私も母に負けないくらい、自分らしく、私だけの「ジブンドキ」を最高に輝かせていこうと思います。

